

最新版(英語版)はこちら**最終改訂年月** : 21 August 2000

背景 : ビタミンEは食物中に含まれる化合物であり、毒性フリーラジカルを除去する抗酸化物質として機能を発揮する。フリーラジカルはアルツハイマー病の病理学的プロセスを担うとのエビデンスがあるため、本障害へのビタミンE適用が関心の的となっている。

目的 : アルツハイマー病患者へのビタミンE投与の効果について調査すること。

検索戦略 : Vitamin E、vitamin-E、alpha-tocopherolの検索語を用い、2002年6月19日にCDCIG Specialized Registerを検索した。

選択基準 : アルツハイマー病患者を対象として、いずれかの用量でのビタミンE投与とプラセボ投与が比較された全ての交絡のない二重盲検ランダム化比較試験。

データ収集分析 : 2名のレビューアが、独立して選択基準を当てはめて試験の質を評価した。1名のレビューアがデータを抽出・分析した。各アウトカムのデータは、ランダム化された患者ごとに求めた。このようなデータが入手されなかった場合は、投与を終了した患者を対象とした分析を実施した。

主な結果 : 登録基準に適合する試験として抽出されたのは1件のみであった(Sano 1996)。参加者341名の本試験にて用いられた一次アウトカムは、死亡、施設入居、日常生活動作3項目中2項目の欠損、全般臨床痴呆評価から3であるとして定義された重度痴呆という4つのエンドポイントのうち、死亡エンドポイントに至るまでの生存期間であった。研究者は、試験を終了した参加者(完了者)のうち、2年以内に主要エンドポイントに至った参加者の総数を群ごとに報告している。エンドポイントに至った参加者数が相対的に少なく、74%(78名中58名)対して完了者では58%(77名中45名)、Petoのオッズ比0.49、95%信頼区間0.25~0.96であったことから、ビタミンEには何らかの効果があると考えられた。しかし、転倒をきたした参加者数はビタミンE投与群の方が多かった(78名中4名に対して77名中12名、オッズ比3.07、95%CI 1.09~8.62)。特定のエンドポイント、または認知、依存、行動障害、および日常生活動作という各二次アウトカムについて報告された結果を解釈することはできなかった。

レビューア見解 : アルツハイマー病患者の治療におけるビタミンEの有効性に関し、十分なエビデンスはない。既報のうちで研究が許容される唯一の試験(Sano 1996)は中等度の疾患を有する患者のみが対象とされており、報告された結果の解釈は困難である。潜在的効果のエビデンスは十分あり、研究を進めることは正当と考えられる。ビタミンE群ではプラセボ群と比較して転倒が過多であったことから、一層の評価が必要とされる。

Citation : Tabet N, Birks J, Grimley Evans J, Orrel M, Spector A. Vitamin E for Alzheimer's disease. The Cochrane Database of Systematic Reviews 2000, Issue 4. Art. No.: CD002854. DOI: 10.1002/14651858.CD002854.

Clib issue No. : 2005 issue 4

CRG名 : Dementia and Cognitive Improvement

* **ご注意** : この日本語訳は、試験的翻訳(Draft翻訳)版として公開するものであり、翻訳の正確さや質が保証されたものではありません。訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。また、この試験的翻訳版はコクラン・ライブラリ2005年issue 4に掲載されたレビュー・アブストラクトの翻訳です。コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されていますので、ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。